第２分科会

心を動かし、主体的にかかわる子を目指して

～乳児保育の環境と保育者のかかわり・認定こども園に移行した視点から～

発表者　　住田美奈子（認定こども園みずほ幼稚園）
指導助言者　山尾　淳子
（島根県立大学短期大学部　非常勤講師）
司会者　　濱岡　千佳（認定こども園みずほ幼稚園）
記録者　　和泉　恵美（認定こども園みずほ幼稚園）
野口萌々香（認定こども園みずほ幼稚園）

１．　発表の概要

①はじめに

近年、少子化、核家族化、女性の社会進出増加により乳幼児の保育が重視されてきている。我が園も社会のニーズを受け、平成 30 年度より認定こども園に移行した。新しく 0・1 歳児を迎え入れ、保育が始まった。

はじめて出会う 0・1 歳児の保育に、今まで経験してきた 3 歳以上児保育はもちろん、2 歳児の保育とも異なり戸惑うことが多かった。0・1 歳児クラスの保育者で話し合いを重ね、より良い環境や保育内容を探り、試行錯誤の毎日だった。

そこで、この 1 年間の保育で見えてきた戸惑い、気づきをもとに、0・1 歳児、主に 1 歳児にとってのより良い保育のあり方、安心できる環境とは何か、そして保育者のかかわりについて、振り返って考えてみることにした。

また、これまでは、2 歳児に対して、‘3 歳児のひとつ下’ という視点で保育をしていたように思う。しかし 0・1 歳児を迎えて保育していく中で、‘0・1 歳児のひとつ上’ という意識に変化してきた。0・1 歳児とつながる 2 歳児保育のあり方についても併せて考えていきたい。

②研究方法

・子どもの姿から保育の課題を把握する。
・保育の課題から見えてきた点についてまとめ、次の保育の展開へとつなげていく。

③実践結果と考察

＜事例１＞　　1 歳児　「新聞紙であそぼう」

導入として絵本「じゃあじゃあびりびり」を読み、その後保育士が実際に新聞紙を破ってみる。興味深そうに見ていた子どもたちは、実際に新聞紙を手に取ると保育者の真似をして、破ってみたりくしゃくしゃにしてみたりと、感触を楽しんでいた。また、保育者が遊びのリードをし、ドーナツの形を作ると子どもたちは食べる真似をしたり「どーぞ」と言って渡したりすることを繰り返し楽しんでいた。このように発達に応じて様々な姿が見られた。

活動の最後に片付けも楽しくしたいという思いから、段ボールで作った動物を用意し、玉入れ遊び

をした。が、子どもたちは自分でうまく玉が作れなくて、食べさせてあげるという遊びになってしまった。

（反省・評価）

・保育者と「どうぞ」など簡単な言葉や身振り手振りで思いを伝え、やり取りを楽しむ姿が多くみられた。様々な発達段階の子どもたちが自分にあった遊びができていたからではないか。

・片付けにつなげようと玉入れを計画したが、思うように発展しなかった。そこまでの活動は、この時期には難しい事が分かり、細やかな発達理解の大切さを学んだ。

（考察）

・乳児保育では一人の保育者が全体をリードするが、他の保育者がそれを汲み取り、周りの子どもたちに語り掛け、家庭のように次の行動を促すことが大切であると、改めて気づかされた。

・複数いる保育者間で、保育のねらいや個々の発達段階などを、きちんと共通理解して進めていく事が、さらに保育の向上につながっていくと思われる。

＜事例２＞　１歳児　　「袋の中身は何だろう？いろいろな素材に触れてみよう」

いろいろな素材（紙コップ・紙皿・洗濯ばさみ・S 字フック・毛糸）で、手や指先を使う遊びを楽しむという活動。素材から興味のあるものを選んで、S 字フックを網に引っ掛けたり、ごちそう作りをしたりと、個々に好きな遊びを見つけ楽しむ姿が見られた。また保育者や友だちとのかかわりも多く見られた。

（反省・評価）

・保育者間でねらいや、個々の発達段階などを共通理解して保育を行うことで、個々の発達の興味にあった遊びの見守りや援助ができた。

（考察）

・コーナー的な遊びは、少人数で落ち着いてじっくりとかかわることができる。さらに、自らの意志で環境に働きかけることができ、主体的にかかわることができるのではないか。よって、０・１歳児においては、少人数でのコーナー的な遊びを多く取り入れることが、主体的な遊びにつながるのではないかと思われる。

＜事例３＞　　２歳児　　「子どもの生活動線から環境を考える」

〇2 歳児クラスに進級した子どもたちの姿として…

・広い自由な空間に喜び「何をしようかな」と園庭やホール、いろいろなところを探索している。

・自分で選んで遊べるようにとおもちゃを種類別に分け設定していたが、おもちゃをあるだけ出すだけで遊んでいない。

・おもちゃの棚や棚の後ろの隙間に入り遊ぶ。

・おもちゃや絵本のスペースを部屋の奥に設定したところ、遊び・排泄・食事・午睡の生活の流れがスムーズにいかず、保育者も子どもたちもバタバタしている。

〇この姿から見えてきた保育の課題とは…

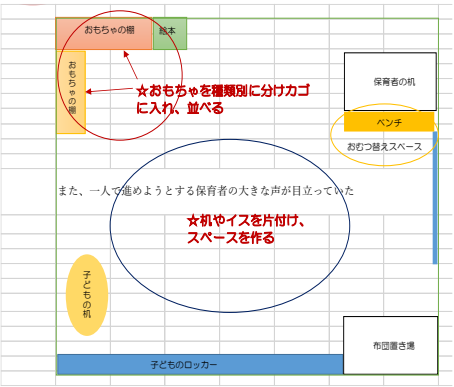
・安心し落ち着いて遊べる空間とはどういうものか？

・子どもの興味のある遊びとはどういう遊びか？

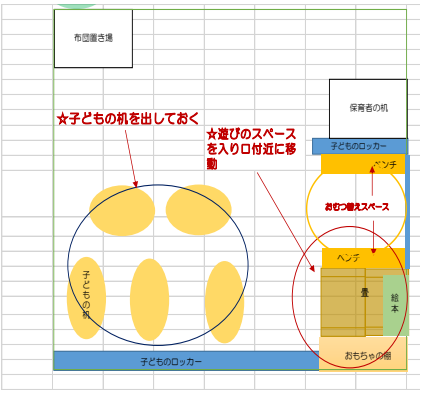
・保育室での遊び・排泄・食事・午睡の生活の流れをスムーズにするにはどうしたらよいか？

この課題をもとに生活動線を考え、まずは保育環境を工夫してみることにした。

Before（進級当初）※人数が増えた事であそびのスペースを保育室の奥に設ける。



After　※遊びのスペースを入り口付近に移動する。



環境設定

- 自分でおもちゃを選んで遊べるように種類別にを用意する。
- 遊べるスペースが必要かと机を片付け、空間をあける

子どもの様子

- おもちゃをすべて出してしまい…そしてあまり遊ばない。さらに空いた棚に入る・乗る。
- 広い空間を喜び走り回る。

改善ポイント

- 棚や隙間に入る姿から区切られた空間・狭い空間が落ち着くのでは？
  安心できる空間を作る。また、そういう遊びを考えてみる。
- おむつ替えをする時などもおもちゃのスペースに行き、絵本を広げたり棚に入ったりする。部屋の奥まで迎えに行き、おむつ替えの場所に誘導するので保育者や子どもが行ったり来たりする。余計に子どもたちも落ち着かないのでは？生活動線を考え直し遊ぶスペースを入口付近に設ける。

環境設定

- おもちゃのスペースを入口付近に設け、畳を敷く
- 指先を使った遊びを好んでいたので、手作りのトングを用意し、ままごと遊びに出す。
- おもちゃを棚に種類別に分けて興味のありそうなものを置いてみる。（パズル・チェーンのおもちゃ、人形、洋服など）

子どもの様子

- 畳を置くことで遊びのスペースが分かりやすくなり、二方面を壁に囲まれたことで落ちついて遊ぶ姿が見られた。
- トングを用意したことで、チェーンを掴んでご馳走を作るなどままごと遊びに興味を持ち始めた
- 全部出して遊ぶ姿は見られなくなり、自分の遊びたいものを選んで遊ぶようになった。

（考察）

・空間をある程度仕切ってコーナーを作ることで、子どもたちは広い空間より落ち着いて遊びにむかえるのではないかと思われる。

・子どもの様子や動きを観察し、環境を考えていく事が子どもたちの安心に繋がり、遊びにむかうように変わっていったのではないかと考えられる。

・環境を整えていったことで保育者の注意・禁止の言葉が減り、「おもしろいねー」「できたねー」などと共に楽しむ保育・かかわりに変わっていったと感じる。

まずは保育者が子どもと共に楽しむことが大切であるのではないか。

＜事例４＞　　２歳児　　「段ボールで遊ぼう」

・安心し、落ち着いて遊べる空間とはどういうものか？
・子どもの興味のある遊びとはどういう遊びか？

→ 子どもたちの姿から段ボール遊びを通して、子どもたちの遊びの変化を見ていくことにした。

① 段ボールがやってきた

１枚の段ボールを部屋の遊びの空間に置いてみる。子どもたちはすぐに「お家みたい」と囲まれたスペースを喜んでいるようだった。段ボールが倒れてしまわないように支える子や、段ボールを踏んで感触を感じている子など１枚の段ボールを用意したことでいろいろな姿が見られた。進級当初は戸惑いが多かったが、この段ボール遊びをすることで子どもたちが変わっていくのではないかと思い、続けて実践していくことにした。

② いろいろな段ボール・丈夫な段ボールで遊んでみよう

①で段ボールがすぐに壊れてしまい、長続きしなかったので２枚重ねにした丈夫な段ボールや少し大きめの段ボールを用意する。

段ボールのトンネルに入り狭いところを喜ぶ姿、友だちと一緒に大きな段ボールに入る姿、つなげた段ボールを電車に見立てて電車ごっこなど友だちとイメージを共有しながら遊ぶ姿などが見られた。また、指先も上手に使えるようになりガムテープを貼ることも喜んでいた。いろいろな段ボールを用意したことで各々に好きな遊びを見つけ遊ぶ姿が見られたと思う。

③ 大きな段ボール・冷蔵庫の段ボールで遊ぼう

大きな段ボールを喜んでいたので、次は背の高い冷蔵庫の段ボールを出したり段ボールの切れ端をだしたりした。

背の高い冷蔵庫の段ボールを置いただけでみんな「おっきーい」と大喜びで中に入っていった。たくさんの人数が入れるので今まで以上に大はしゃぎの子どもたちだった。窓を作るとのぞいたり顔を出して友だちを驚かせたりと言葉を交わしながら友だちと関わる姿がたくさん見られた。

また、端切れの段ボールをつなげて道を作ったり、その上を歩いたりと電車ごっこから少し発展した様子も見られた。

④ 段ボールのお家や興味のある素材を見つけて遊んでみよう

③で使った冷蔵庫の段ボールに屋根をつけておうちにしてみる。また。手や指先を使う遊びを好んでいたので段ボール遊びに上手く合わさるか半信半疑だったが、洗濯ばさみやＳ字フック、チェーンなどを取り入れてみた。

囲まれた空間からさらに屋根をつけることでお家のようになり、安心して遊んでいるようだった。出たり入ったりすることを楽しむ子やお家の中で洗濯ばさみやＳ字フックを段ボールにつけていく子、チェーンを穴の中にひたすら入れる子などいろいろな場所で好きな遊びが展開され、この一連の活動の中で一番集中して遊ぶ姿が見られた。

（考察）

・カーテンの後ろや棚の隙間などの狭い空間に入る…という子どもの姿が段ボール遊びのきっかけとなった。子どもの姿をよく見て、どういう事を喜び興味があるのかを考え、それを活動に取り入れ

ていくこと、それが継続して楽しめる活動につながったのではないか。

・いろいろな段ボールを用意したり興味のある素材を取り入れたりしたことで、自分から好きな遊びを見つけて遊ぶ姿が見られた。いろいろな発達段階の子がいる２歳児には、それぞれの発達にあった遊びの幅が必要ではないか。また、その素材を工夫することが保育者の大切な役割となってくると考えられる。

・子どものしぐさや表情・言葉から保育者が一人一人の思いを汲み取り、「できたね」「たのしいね」などと受け止め、言葉にして返していったことで「もっと遊びたい」という子どもの意欲につながったと感じる。

・この継続した活動の中で、自分の好きなことを見つけ、自分を出して遊べるように変化していった子がいた。発達にあった素材と保育者の温かな見守り、ゆったりとした時間が安心して遊びこめる環境になり成長を促したと考えられる。

＜研究のまとめと今後の課題＞

・1歳児クラスから進級した当初、予想外の２歳児の姿に保育者が右往左往してしまい、子どもたちの行動をマイナスに捉えてばかりだったように思う。「大きくなった」「何をして遊ぼうかな」「楽しい！」という遊びたい気持ちであふれたそのままの姿をもう少しプラスに捉えることが出来ていたら違った対応が出来ていたはずである。0，1歳児の受け入れを始めたことで、2歳児の保育内容を振り返るいい機会になった。今後は０，１，２歳児の発達を一連の流れとして捉え、2歳児の発達がより促されるような素材の工夫や子どもたちの「大きくなった」という喜びを共有し、余裕をもって発達を後押しできるようなかかわりを、考えていきたいと思う。

・0，1，2歳児保育では、複数いる保育者それぞれが子どもたちを見守り、語りかけ、家庭のように接していく事が大切である。個々に寄り添った家庭的な保育が、見守られているという安心感を生み、さらには自己発揮につながるのではないかと考えられる。また、ただ見守るだけではなく、時には保育者が動きのモデルを示しながらリードしていくことも必要である。

・子どもと保育者との相互的なかかわりを大切に、保育を展開していく事がこれからの２歳児に必要だと考えられる。2歳児の発達段階を再確認し、子どもたちの動きに合わせてあらゆる環境を整えていき、全職員で話し合いを進めながら今後も取り組んでいきたい。一人一人の子どもの発達に応じた環境を工夫することが、子どもたちがいきいきと、心を動かし、主体的に遊ぶ姿に繋がっていくものと思う。

・この研究をするにあたり、「幼保連携型認定こども園　教育・保育要領」を読み返した。0，1，2歳児保育において大切だと感じていたことなどが具体的に言葉で表現してありとても参考になった。また、自分の保育と照らし合わせることで子どもの育ちが具体的に分かったり、足りないところが見えてきたりと、保育の質の向上に繋がるのを実感した。

・はじめて0，1歳児を担任して、子どもたち一人一人に愛情をもってかかわる、愛着関係こそが保育の原点だと強く感じた。今回の研究を通して学んできたことを土台とし、これからも子どもの姿をしっかりと把握し、子どもたちにたくさんの愛情を注いで保育をすすめていきたいと思う。

２．研究討議

①発表に関する質疑応答

Q、安全対策（素材を口に入れる、友だちを傷つけるなど）で工夫されていることはあるか？

A、素材、おもちゃなどは口に入れても安全なものを用意する。

噛む、ひっかくなど友だちを傷つけてしまう子に対しては、側に保育者がつき、手が出そうな時間帯、環境の時には、特に意識して見守っている。

Q、0，１歳児の行事の参加はどのようにしているか？

A、発達に応じて、また時間も調節しながらだが、すべての行事に参加している。

②ワークショップ

温かい安心できる保育環境とは…という研究内容にちなみ、わが園で取り組んでいる手作りの室内飾り、年長児が作る針山作りを体験してもらった。

自分で糸や布・レースなどを選び、自分の園の温かな保育室を想像しながら、作る楽しさを感じてもらえたように思う。

３．指導助言

０～２歳児保育を受け入れて２年目の研究発表。まさに戸惑いと子ども理解の真最中。研究発表を受けることで、より細やかに深く考え、確立していくことがみずほ幼稚園の核となるよい機会だったと思う。これまでの幼稚園の満２歳児の受け止めと、０～1 歳児を担任したら「えっ、この子たちが２歳になってあんなことが出来る？」「できても無理をさせてない？」「いいのかな？」「2 歳児に上がった子どもたちが集まらない」「ロッカーに潜り込んでしまう」「何で？」「どうすればいいの？」これが研究のスタートであることがすごくおもしろい！

ある程度、子どもの成長や活動の見通しが見えている、研究の進め方ではなく、本当に困って→試行錯誤して→話し合って→やってみて→「あっ！そうなんだ！」と、気づいていくことが大切である。

物事の進め方に『ＰＤＣＡ』という考え方がある。Ｐｌａｎ（計画）Do（実行）Ｃｈｅｃｋ（振り返り）Ａｃｔｉｏｎ（改善・処置）の４つのステップの順で進めていくことで、無駄なくモレなく進めることが出来ることから、仕事の基礎とも言われている。

まず、『Ｃｈｅｃｋ（振り返り）として現状はどうか？』を考える。

続けて、『Ａｃｔｉｏｎ（改善・処置)、何から改善していけばよいのか？』を整理する。

そのうえで、『Ｐｌａｎ（計画)』　『Do（実行)』と続く。現状を振り返り、そこにうまく新たなやり方を導入できるよう考えていく方法である。

気づけば、みずほ幼稚園はこの方法で研究を進め、子どもの姿から気づいて検証を行ってきた。

ちなみに今、『ＳＯＡＰ』の視点とも言われている。

Ｓ　ｓｕｂｊｅｃｔｉｖｅ　ｄａｔａ　（サブジェクティブ）　主観的データー

・誰と誰が、どこで何をしたか
・どのような人間関係が見られたか
・環境とどう関わっていたか
・どのような道具を使っていたか

Ｏ　ｏｂｊｅｃｔｉｖｅ　ｄａｔａ　（オブジェクティブ）　客観的データー

・どこに面白さを感じていたか
・どのような経験をしていたか
・何が育っていると考えられるか

幼児理解

Ａ　ａｓｓｅｓｓｍｅｎｔ（アセスメント）　評価

・どのような成長につながりそうか
・次はどのような経験が必要になるか

Ｐ　ｐｌａｎ（プラン）　計画

・次の成長を促すためにはどのような環境や活動が必要か
・どのような援助が必要か

理解に基づいた援助

これまでの保育環境といえば「子どもがにぎやかに遊べるか」を中心に考えてきた気がする。これは「集団のための環境」の視点ではないだろうか。(3 歳以上児には必要な部分はある）友だちとの関わりが充実してくる発達の時期である。

しかし、特に０～2 歳児のような子どもたちにはこの段ボールの事例のように「一人のための環境」の視点で考えることが大切であると思う。これは 3 歳以上児であっても様々な発達や配慮が必要な子どもが増えている中では大切な視点ではないだろうか。一人で落ち着いて過ごしたり、自分なりのリズムで過ごせたり、興味に応じて自分からやってみたいと思える子どもにとっての環境を考えていく事が大切である。

子どもが主体的に自ら見つけた遊び。熱中している遊びにはそれぞれの子どもの各時期の発達に必

要な経験が含まれている。子どもは自ら発達に必要な遊びを選んでいる。
子どもたちが遊びを通して多様な経験をしていくプロセスの中で、その子に添って丁寧に支えていくことが「保育者の援助」である。
　子どもたちが表すたくさんの姿の中から「今大切にしなければならない経験や学びの芽」を読み取る保育者の共感性が大切である。
　０～2 歳の子どもにとっての生活はすべて未知のもので不安の対象でもある。温かい雰囲気の中で、子どもの想いを受け止める空気感の中で、興味を広げてくれる先生方がいると不安を軽減し、能動的な意欲につながっていくと思う。子どもの笑顔・子どもの意欲的な姿は、保育者にも喜びとして伝わり、安心感・共感となる。それが安定した家庭での関わりに繋がっていく…。
まさに子育て支援だと思う。
　保育というのは、子どもたちが持っている可能性を彼らの中から存分に引き出して、人間として豊かに育てていくという営みである。
‘保育の質が高い’というのは‘子どもたちの持っている可能性をどれだけ上手に引き出しているか’ということ。ではその子が持っている可能性が存分に引き出されているかどうかを、何で判断するのかというと「子どもたちがいい顔をしているか」「その子の持っている自然な優しさや温かさが随所に出ているか」だと思う。その子にとって充実していたり、何かに熱中してイキイキと目が輝く瞬間を送れていたりするか、気負いや無理がなく、その子のままで生活出来ているかということを、保育者は大切にしていけるといいのではないかと思う。
　保育者自身、あることに出会ったときに「こういう活動をしたかった」とか,ある活動をしている人と出会って「私もしてみたい」とかそういう風に心に響いてくる出会いもあるだろう。そして
　「あっ！」と思えるモノやコトに出会ったら、自分なりに一生懸命にやってみてほしい。そうすると「ここから更にこうやっていくと面白そう」というように、段々その世界の面白さを深く理解して、保育が自分ならではのものになっていく。そういうものを増やしてほしい。子どもも一緒である。幼い頃から、そういう体験をどれだけ多く、そして深くするのか。その子の活動の幅や可能性はそこから見えてくる。子どもたちの発達を理解し、一人一人の子どもたちを大切に、日々の保育を子どもと楽しんでください。